



Title	To the Lighthouse をめぐって
Author(s)	田代, 幸造
Citation	明治大学教養論集, 74: 26-49
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8961">http://hdl.handle.net/10291/8961</a>
Rights	
Issue Date	1972-12-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## *To the Lighthouse* をめぐって

田代幸造

*To the Lighthouse* について作者 Virginia Woolf がその日記の中ではじめて言及しているのは、1925年5月14日の項においてである。その中で彼女は次のように述べている。

I'm now all on the strain with desire to stop journalism and get on to *To the Lighthouse*. This is going to be fairly short; to have father's character done complete in it; and mother's; and St. Ives; and childhood; and all the usual things I try to put in—life, death, etc. But the centre is father's character, sitting in a boat, reciting *We perished, each alone, while he crushes a dying mackerel*. However, I must refrain. (1)

現実の作品においては鯖を圧殺するのは、船頭 Macalister の息子になっているとはいえ、*We perished, each alone* という William Cowper の *The Castaway* からの一行を口ずさむのは作者 Virginia Woolf の父親 Leslie Stephen がその原型であるところの Ramsay 氏であり、作者はこの Ramsay 氏の姿に人間の限りない孤独な姿を観てとり、またその上「人生・死」などのテーマをこの作品の中に織りこもうとした意図が、上の引用文からうかがい知ることが

出来る。この限りでは *To the Lighthouse* はまさに *Jacob's Room*, 及び *Mrs Dalloway* に直線的につながる作品であり、*Woolf* 的な作品である、ということが出来よう。だが問題は、このような作者の意図が文学作品としてはたしてどのように結実されているか、ということであり、このような自伝的な追想にも似た作品を創作することが、作家としての *Virginia Woolf* にとってどのような意味を持つのか、ということではなければならない。したがってこの線にそって、*To the Lighthouse* を観察してみよう。

## I

この作品は *Ramsay* 夫人が末息子の *James* に明日の灯台行きを約束する場面から始まる。

‘YES, of course, if it’s fine tomorrow,’ said Mrs Ramsay. ‘But you’ll have to be up with the lark,’ she added.

To her son these words conveyed an extraordinary joy, as if it were settled the expedition were bound to take place, and the wonder to which he had looked forward, for years and years it seemed, was, after a night’s darkness and a day’s sail, within touch. (5)

まだ幼ない息子にとって母親の約束というものは絶対的な重みと確実さをもって迫ってくるのは当然であり、たとえ母親が「明日天気ならばね」という条件をつけようとも、「一夜の闇」が明ければ、長年待ちこがれていたような気がする灯台行きの実現は確実なもののように思われて *James* は歓喜に浸り、折りしも手にしていたアーミー・アンド・ネーヴィ百貨店のカタログの中の冷蔵庫の絵も「喜びにふちどられて」見えるのだった。このような純真な喜びを誰が阻むことができよう。もし阻む者があるとすれば、彼はその幼児の心に深い傷を残さずにはすまないであろう。だが無謀にもこの暴挙をあえてやってのけ

たのはほかならぬ彼の父親である Ramsay 氏であった。彼は言う、「だが、明日は天気にはなるまいよ」と。この言葉は Ramsay 夫人の条件を完全に否定するものであり、それは James にとってはまさに青天の霹靂であり、希望と歓喜を打ちくだく鉄槌にほかならなかった。

幼ないながらも、「毅然として、妥協しようとしなない厳しい」性格を持っている James ならずとも「父親の胸に穴をあけて、その場ですぐに殺してしまうような手斧か、火掻き棒か、何かしらの武器があったら、それをつかんでいたかもしれない」と思うのは当然であつたろう。だが Ramsay 氏にとっては、この暴挙は決して悪意から出たのではなくして、彼の論理にしたがえば、それはむしろ善意の言動なのであり、決して暴挙の名に値するものではなかったのである。この暴挙をして善意の言動たらしめる彼の論理とは次の如きものである。

What he said was true. It was always true. He was incapable of untruth; never tampered with a fact; never altered a disagreeable word to suit the pleasure or convenience of any mortal being, least of all of his own children, who, sprung from his loins, should be aware from childhood that life is difficult; facts uncompromising; and the passage to that fabled land where our brightest hopes are extinguished, our frail barks founder in darkness..., one that needs, above all, courage, truth, and the power to endure. (6)

つまり彼の言動の規範となるものは、ある事が論理的に真実であるか否か、ということであり、この規範をつらぬくためには、他人の感情などは一顧の価値さえもないのである。「人生は困苦に充ちたものであり、事実妥協を許さないものである」ということが、彼にとっては一つの真実であり、したがってこれから世間の荒波に船出しなければならない子どもたちには、特に「おのれの腰から出た」可愛い子どもであってみればなお更のこと、彼自身の真実を教

えこんでおかねばならない、というのが彼の愛情であったのだ。したがって、「明日は天気になるまいよ」という言葉を明確に告げて事実をしかと胸にたたきこみ、ばら色の空想を破壊することは、彼にとっては暴挙どころか、むしろ愛情の発露にほかならないのであった。彼の構築する世界は一点のごまかしも許されない冷徹な論理の世界である。

だが、このような冷徹な論理は子どもの理解能力をはるかに超えるものであり、「だが明日は天気になるまいよ」という言葉は James の心に深い傷あとを残すのみであった。したがって James にとって父親の存在は、母親との楽しい団欒を破壊し、母親との心の結びつきを引き裂く刃物でしかなく、おのれの正しさを妻や子に押しつける暴君であり、おのれの正しさに酔い痴れる憎悪すべき存在でしかなかった。

Such were the extremes of emotion that Mr Ramsay excited in his children's breasts by his mere presence; standing, as now, lean as a knife, narrow as the blade of one, grinning sarcastically, not only with the pleasure of disillusioning his son and casting ridicule upon his wife, who was ten thousand times better in every way than he was (James thought), but also with some secret conceit at his own accuracy of judgement. (6)

妻が自分のことをどのように思うとも、また息子 James が自分に対してどのような感情を持つとも、Ramsay 氏にとっての真実は、「多くの音階に分かれているピアノの鍵盤のようなものであり、あるいは26文字が順序正しく並んでいるアルファベットのようなもの」であるが故に、彼はその一文字一文字を確実にわがものにしながら「はるか彼方に赤く明滅するZ」にむかって休むことなく歩まねばならないのであり、他人もまたそうすることが当然なのであった。それ以外の人生は彼には考えられないのであった。彼の人生はしたがって、「極地の氷に覆われた荒野を横断するわびしい探検隊の隊長」のように孤

独である。その上學究の徒としての彼が今までに到達できたのは、アルファベット26文字のうちのQまでであり、どうしてもRに到達できずにいる自分の才能の不足を嘆き、彼は焦慮にさいなまれているのだった。

Feelings that would not have disgraced a leader who, now that the snow has begun to fall and the mountain-top is covered in mist, knows that he must lay himself down and die before morning comes, stole upon him, paling the colour of his eyes, giving him, even in the two minutes of his turn on the terrace, the bleached look of withered old age. Yet he would not die lying down; he would find some crag of rock, and there, his eyes fixed on the storm, trying to the end to pierce the darkness, he would die standing. He would never reach R. (41)

Ramsay 氏の真実にむかっての雄々しい挑戦、しかもついにZに到達できないであろう空しい努力、そしてその道程の中にある自己の孤独との闘いを、Virginia Woolf はこのように描写している。Tennyson の *The Charge of the Light Brigade* 中の “Stormed at with shot and shell”, “Someone had blundered” という句を誦しながらテラスを行ったり来たりする彼の姿は、おのれの孤独に打ち勝って、おのれの目標Zに到達しようとするがQに釘づけになってしまってどうしようもない彼の焦燥のあらわれであり、彼の論理の世界の不毛の象徴ではなからうか。彼の友人で植物学者である Banks 氏によれば、「彼はほんの25才の時に小冊子を著述して、哲学に対してある明確な貢献をしたのだったが、その後の著作は多少の敷衍と繰り返しにすぎないものだった」のだ。そしてそれ故にこそ、「妻に嘲笑をなげかけ、おのれの判断の正確さに密かなうぬぼれを懐きながらも」、妻の広大な包容力の前に、おのれの不毛を癒してもらおうべく膝まづかねばならなかったのだ。

## II

Ramsay 氏の世界が論理によって構築されたものであるとすれば、Ramsay 夫人のそれは女性特有の本能と直観による世界である、ということが出来る。

She was silent always. She knew then—she knew without having learnt. Her simplicity fathomed what clever people falsified. Her singleness of mind made her drop plumb like a stone, alight exact as a bird, gave her, naturally, this swoop and fall of the spirit upon truth which delighted, eased, sustained—falsely perhaps. (34)

彼女は単純であるが故に、そしてそれだけ本能的なるが故に、直観によって事物の核心にふれることができるのである。「明日は天気にはなるまいよ」という夫の言葉によって James の心が深い痛手をこうむった時にも、Ramsay 夫人は直ぐにそれを悟り、そして「この子は一生このことを忘れないでしょう」と、直観的に James の心を読みとることができたのも、この本能的直観とでも言うべきもののおかげであった。事実、十年後の James の父親観を支配していたのは、まさにこの時の父親の像ではなかったか。つまり Ramsay 夫人の直観の正しさは十年後になって証明されたのであった。

だがこのような直観による判断は、ややもすると主観的な独断におちいり勝ちである。たとえば Bankes 氏は、30 才すぎても未婚でいる女流画家の Lily Briscoe からみれば、自然科学（植物学）に専念し、Ramsay 氏にはない偉大さを持った人物であり、しかも彼女の芸術に対して理解を示してくれる唯一人の好ましい人物であるが、Ramsay 夫人からみれば、彼は常に「かわいそうな Bankes さん」であることに、それは如実にあらわれているのではなからうか。また、たとえば、灯台守の坐骨結核を病む息子への贈り物として靴下を編んでいる時に、Bankes 氏と Lily Briscoe が肩を並べて散歩している姿を見かけて、「二人は結婚すべきだ」と、きめこんでしまうのも、この例の一つである。

だが、独断も単に一人で胸のうちにしまって置く分には第三者への影響は皆無といって差し支えないが、これが言動となって表面化すると、それは当事者にとっては一つの拘束力となって圧迫する力を発揮してくる。独断もこの段階になると、一種の横暴 (tyranny) となる。「ドアは閉めて、窓は開けて……」と、彼女は家中の人々に命令する。そこには何らの論理的根拠はないのだ。ただ彼女がその方がより健康的である、ときめつけているだけであって、それを家中の人々に実行させないと気がすまないのである。その上 Paul Rayley と Minta Doyle を強引に散歩に追いやって、婚約の機会を作ってやったことに彼女は満足する。Paul と Minta の場合にも、ただ彼女が、「二人は結婚すべきだ」と、思っただけであり、なぜ「二人は結婚すべき」なのかの論理的な根拠は明らかではなく、Ramsay 夫人が直観的に彼らの結婚を思いつき、それを実行させたまでなのである。人間を結ぶものは愛情であると知りながらも、その愛情は「数学者が記号に対して持つような」透明な愛情としか理解できないが故に、結婚はまさに「墮落」であり、「稀薄」でしかあり得ないと思っている Lily にとっては、Ramsay 夫人の自分に対する結婚のすすめはまさに横暴であり、必死に抵抗せざるを得ないものであった。晩餐会の席上、フランスの料理人とくらべてイギリスの料理人がいかに劣っているかをしゃべり続ける Ramsay 夫人を見て、彼女は思うのだった。

...she laughed, she gesticulated, till Lily thought, How childlike, how absurd she was, sitting up there with all her beauty opened again in her, talking about the skins of vegetables. There was something frightening about her. She was irresistible. Always she got her own way in the end, Lily thought. (116)

そして彼女は Ramsay 夫人の精神のたくましさの前には、おのれの精神の貧しさを痛感せざるを得ないのだった。

だが横暴とは、自己の意志に他人を従属せしめることであってみれば、それ

は母性本能の一変型であろう。何故ならば、母性本能とはわが子を自己の意志のままに扱いたいという本能のあらわれにすぎないからである。以上述べた如く横暴とも見える Ramsay 夫人は、したがって人一倍母性本能の強い女性であった、ということが出来よう。たとえば彼女はわが子が生長することを望まず、いつまでも幼少年のままであってこればいい、と切ない希望を胸に懐くのだった。世間はいつも静穏な時ばかりではなく、暴風雨に荒れ狂うこともあるのであり、そんな世間の激波にわが子がもまれることは想像するだに耐え難いことであつたから。そしてわが子はわが子なるが故に他の誰よりも幸福になるのが、彼女にとっては当然至極のことなのであつた。娘の Prue はきっと美人になる。そして婚約したばかりで幸福に充ちあふれている Minta よりも今にもっと幸福になるだろう、と確信するのであつた。Andrew はわが子ながら特に数理的方面にすぐれた才能を持っている。今にきつと奨学資金受給の資格をとるだろう。だがそんなものをとろうがとるまいが、Andrew はわが子であり、すぐれた才能の持ち主であることに変わりはないのだ、と思つてますます Andrew がたのもしく感じられるのであつた。そしてまた James は八人いる子どもの中でも、自分の気持を共に分け持っているが故に一層いとほしく、わが胸に抱きしめたい衝動に駆られるのであつた。ともかく彼女はいつも赤ん坊を抱いていたいという本能をいかんともすることが出来なかつたのである。

She would have liked always to have had a baby. She was happiest carrying one in her arms. Then people might say she was tyrannical, domineering, masterful, if they chose; she did not mind. (68)

Lily Briscoe は晩餐会の席上で思うのだつた。「夫人は、まるで男の方たちには何か足りないところがあるみたいに、いつも同情をするくせに、女には決して、してくれないんだから。まるで女は男に欠けているものを持ってるみたい」と。だが母性本能の強い Ramsay 夫人にとっては、これは至極当然のことであつた。彼女から見れば自分に備わっているのに、それを持ち合わせていな

い男性という存在はすべて、幼児の如き存在であり、だからこそ女性の暖かい大きな包容力で覆ってやらなければならなかったのだ。

だがその反面、Ramsay 夫人は女性に欠けているところの「男性の知性という賞嘆すべき組織」に対しては絶対的な信頼を置いているのである。特に夫 Ramsay のそれに対しては畏敬の念さえ懐いているのだった。

Indeed he seemed to her sometimes made differently from other people, born blind, deaf, and dumb, to the ordinary things, but to the extraordinary things, with an eye like an eagle's. His understanding often astonished her. (81)

そして彼女は、「私なんか夫の靴紐を結ぶにも値しない人間だ」と、思うことがあるのだった。しかし彼女の中のこのような一見まったく相反する方向を持った感情も、彼女が構築する本能的、直観的な世界においては、何ら矛盾することなく、いずれもが「真実」であり、彼女はおのれの懐く「真実」に対して忠実であったのだ。それ故にこそ、おのれの目標にむかって独り努力を重ねながらも、自分を失敗者であると思っ、おのれの名声のはかなさに、不安と焦燥と孤独を禁じ得ない夫 Ramsay が、彼女の膝下に慰めと同情を求めてくる時、彼女は女性の生成力を惜しみなく夫に注ぎ込み、大きな包容力で夫を覆うことができる典型的な良妻であり得たのであり、またそうすることが彼女にとってのはが身を「真実」に委ねる唯一の、最善の道であったのだった。夫 Ramsay が夫人の同情を求め、彼女に全幅の信頼を置くときに、彼女の生成力は惜しみなく夫に伝わり、Ramsay 氏はその生命力にうるほうのであった。それは彼女の膝の間にすわっている James にさえ、はっきりと感じとられるほどのものであった。

Standing between her knees, very stiff, James felt all her strength flaring up to be drunk and quenched by the beak of brass, the arid

scimitar of the male, which smote mercilessly, again and again, demanding sympathy. (44~45)

これはまさに Ramsay 夫人の持つ包容力と庇護の才がいかに発揮された瞬間であり、Ramsay 氏の構築する論理と事実偏重の世界が、Ramsay 夫人の有する本能的、直観的な世界の中に音もなく包みこまれ、両者が共鳴し合う瞬間である。そして後者の生成力が「湧きいづる泉」の如くに前者の世界を浸す瞬間である。かくして Ramsay 氏は再び生命力が身内によみがえるのを感じて、「満足に寝ている子どものように」、彼は部屋から出て行き、一方 Ramsay 夫人は創造の営みを果たした疲労と恍惚の淵深く沈潜するのであった。

Immediately, Mrs Ramsay seemed to fold herself together, one petal closed in another, and the whole fabric fell in exhaustion upon itself, so that she had only strength enough to move her finger, in exquisite abandonment to exhaustion, across the page of Grimm's fairy story, while there throbbed through her, like the pulse in a spring which has expanded to its full width and now gently ceases to beat, the rapture of successful creation. (45~46)

この瞬間には、言葉は両者の共鳴の阻害になるばかりであり、論理は直観の前にその無力をさらけ出すのみであり、Ramsay 夫人の疲労困憊にもかかわらず、Virginia Woolf の言う femininity が masculinity に対して勝利を高らかに謳歌するのであった。

このような瞬間は、晩餐会の散会のあとで、人々が各自の場所に散り、子ども達も眠ってしまい、夫婦が自分たちの部屋に二人きりになった時にも訪れたのであった。「妻は賢くなく、本から学ぶことなどは何もないのだ、と思いたい」彼ではあったが、それでもなお、妻が自分を愛している、と言ってくれないことを彼は不満に思うのであった。妻は夫のこのような気持ちを十分に察知

しながらも、ついにその言葉を口にすることは出来なかった。言葉は直観で得られたものが論理によって整理された形式であり、したがってそれは直観が持つ生命を枯死させてしまうばかりである、ということを知っている Ramsay 夫人は本能的に知って、それを恐れたからであった。

‘Yes, you were right. It’s going to be wet tomorrow.’ She had not said it, but he knew it. And she looked at him smiling. For she had triumphed again. (142)

つまり、Ramsay 夫人は夫の要求した言葉の代りに、「明日は雨になるでしょう」と、言うことによって、一見、事実の前に Ramsay 夫人の直観の世界は崩れ去ったかに思えるのだが、自分の気持を論理化することなしに、しかも夫には十分に自分の気持ち、感情を伝達することができたのであり、彼女の本能的な、直観的な「真実」が、夫の事実偏重の論理性に対して勝利を占めたのであった。

その晩の晩餐会は、主として Bankes 氏の孤独を慰めるために Ramsay 夫人が計画したものであった。だがそれは最初のうちは失敗であるかに見えた。一堂に会しながら、各自がおのおの勝手な考えにふけり、自己の内心の秘密がばれるのを恐れて、おのおの殻にとじこもり、お互いの心の融和は微塵も存在しなかったのだった。Charles Tansley は自己主張の機会をうかがい、Ramsay 氏は Carmichael 氏がスープのお代りを要求したのに腹を立て、自分の名声はいつまで続くかを絶えず気にし、今度出版した本の評判に頭を悩ましながら、George Eliot の Middlemarch について Minta に自分の感想をまくしたて、この本さえ読まない若者を軽蔑するのだった。Lily はまたしても Ramsay 夫人の独りよがり之苦々しく思い、自分の絵がいかにしたら完成するかを考えながら、テーブル・クロスの様態を眺めているし、Carmichael 氏は老いの身を椅子にゆだねてスープのお代りを要求し、超然と構えているので誰もよりつく

すぎもなく、肝心の Bankes 氏は Ramsay 夫人の晩餐会への強引な勧誘を苦々しく思って、果てしなく続くように思われるこの晩餐会に研究の時間をとられることに腹を立て、独りおのれの研究に耽っている方がどんなに気楽なことか、と考えている。Ramsay 夫人はこのような一座の空気を察知して、夫が何か共通の話題を提供してくれればいいのに、と思うが、この期待は満たされることなく、男性の不毛を痛感するのみであった。結局はこの場の空気を收拾し、一座の融和を生み出すのは、Ramsay 夫人の生成力に俟たざるを得なかったのだ。

Raising her eyebrows at the discrepancy ... Nothing seemed to have merged. They all sat separate. And the whole of the effort of merging and flowing and creating rested on her. Again she felt, as a fact without hosterity, the sterility of men, ... (96)

機を見て Ramsay 夫人は、同席していた子ども達に蠟燭をとますように言いつけた。すべての蠟燭がともされると一座の人々の中に何か変化が生じたように思われた。

...for the night was now shut off by panes of glass, which, far from giving any accurate view of the outside world, rippled it so strangely that here, inside the room, seemed to be order and dry land; there, outside, a reflection in which things wavered and vanished, waterily. ...and they were all conscious of making a party together in a hollow, on a island; had their common cause against that fluidity out there. (112)

この変化とは、蠟燭によってもたらされた一座の融和にほかならなかったのだ。ということは、これは蠟燭をとますように子ども達に言いつけた Ramsay

夫人の、融和を生み出す本能的な、直観的な生成力によるものであって、この蠟燭こそは、「移り行くもの、流れるもの、空虚なるものの中であって、永遠に関与し、変化をまぬかれて、ルビーのように輝やく」彼女の本性の象徴である。彼女は心から安静と安息とを感じて思うのだった。

Of such moments, she thought, the thing is made that remains for ever after. This would remain. (121)

そしてまた、おのれの生成力に満足して次のように思うのだった。

They would, she thought, going on again, however long they lived, come back to this night; this moon; this wind; this house; and to her too. (130)

つまり Ramsay 夫人は「この瞬間を永遠なるものにした」のだった。これこそがすべてを包容し、庇護せずにはおかない彼女の母性本能の崇高なる実現であり、彼女の本性であり、彼女の生成力の結実であって、Lily の場合における芸術品創作に匹敵するものであった。しかし反面からみれば、Lily の言う、「結局は自分の思い通りにする」Ramsay 夫人の横暴であるかもしれないが、ここにわれわれは *Mrs Dalloway* の中の、「自分が居合わせた場所をすべて、おのれの世界に化してしまう純粋に女性的な、異常な才能、女性特有の才能」を持つ Clarissa (*Mrs Dalloway*)<sup>(2)</sup> の直系としての Ramsay 夫人を見出すのである。

### III

第Ⅱ部（時は過ぎ逝く）は、次作 *The Waves* の各章の序論部にも比肩することができる見事な文章であり、それはまさに散文詩とでも言うべき傑作であ

る。*The Waves* における各章の序論部が太陽の移動と波によって時の経過を示しているように、この第Ⅱ部においては、Ramsay 家の別荘が自然の力の前に徐々に荒れ果ててゆく過程のうちに十年の時の経過を表現している。

かつては生命の灯火が見られた Ramsay 家の別荘には、この十年間に訪れる人もなく、人間の営為は自然の破壊力のなすがままにゆだねられて、脆くも崩れ去るかに見えた。この十年の間に、Ramsay 夫人は死に、美人の誉れ高い Prue は父親に手をひかれながら人妻となり、やがて産褥の床であの世へと旅立ってしまった。その上 Andrew も第一次大戦の戦場で砲弾の炸裂にあい、一瞬にして若い生命を散らしてしまったのだった。また Ramsay 夫人があれ程熱心にその仲をとりもち、「自分が死んでも、この夫婦が……」と、期待をかけた Minta と Paul の結婚は完全な失敗に帰したのであった。これらの事実は何気なく、ほんの数行で、しかも括弧の中に示されているのだが、異常な重みでわれわれ読者の心を圧するものを持っている。それは第Ⅱ部全体が Ramsay 家の別荘に象徴される Ramsay 氏の事実偏重と論理の世界が、時の経過によって自然の破壊力の前にその無力をさらけ出して、崩れ去ってゆく過程を表現している中であって、括弧の中に示されたこれらの事実、Ramsay 夫人の持つ本能的直観の世界が同じように崩壊せざるを得なかったことを象徴しており、論理性であれ、直観であれ、すべての人間の営為は自然の力の前には全く無力であることを示しているからである。

だが果たして人間の営為はそれ程もろく、はかないものであったろうか。或る日突然、Ramsay 家のお嬢さんの一人から、別荘を人が住めるように至急修復してくれるように、との手紙が McNab 婆さんのもとにとどき、彼女は Bast 婆さんとその息子である George の三人で急拠、別荘の修復を始めたのだった。

Slowly and painfully, with broom and pail, mopping, scouring, Mrs McNab, Mrs Bast stayed the corruption and the rot; rescued from the pool of Time that was fast closing over them now a basin, now a

cupboard ; fetched up from oblivion all the Waverley novels and a tea-set one morning ; in the afternoon restored to sun and air a brass fender and a set of steel fire-irons. George, Mrs Bast's son, caught the rats, and cut the grass. (159)

ここで“the Waverley novels”は Ramsay 氏の世界を、そして tea-set をはじめとする諸々の家具は Ramsay 夫人の世界を象徴していることは明らかであり、これらを忘却から救い出してくれたのは Ramsay 氏の論理性的の世界とは何のかかわり合いもない、むしろ Ramsay 夫人の本能的直観の世界に近い存在ではあるが、夫人のような包容力も、他を庇護しようとする意志も意欲も持ち合わせていない二人の老婆（たとえば McNab 婆さんは三人の子どもを持ったが、そのうち二人は私生児であり、残りの一人は彼女を捨ててどこかに行ってしまった）と、その息子であり、彼ら三人は Ramsay 夫妻が象徴する二つのタイプ以前の、人間そのものの、言い換えれば、より根源的な、より原初的な、いわば裸のまま自然と対置される人間性そのものである。ということは、その力は自然の確実に一步一步押し寄せてくる破壊力の前には、よろめき、びっこをひく弱々しいものであれ、人間の原初的な生命力と、生きんとす意志の強さが、ついには自然の破壊力の進行を辛うじておし止めたことを意味するものであり、ここに作者 Virginia Woolf の人間性に対する深い信頼がうかがえるのである。一見、自然の前にはまったく無力であるかの如く思われた人間の営為は、かくして存続することができたのである。

#### IV

Ramsay 家の別荘がある Skye 島に、画家の Paunceforte 氏が訪れて以来、絵は「きまって緑と灰色で、レモン色の帆船と、浜辺にいるピンクの服を着た女たち」になってしまっていた。だが Lily Briscoe はこのような絵に飽き足らず、おのれの「真実」を追求してやまない女流画家である。彼女は窓辺に

James を抱いてすわっている Ramsay 夫人（それは聖母マリヤと幼児キリストを連想させる永遠に聖なる画題である）を描こうとして、芝生の上に画架をたてる。だが直感したと思われる「真実」は絵筆をキャンパスにおろす途中で、いつも消失してしまい、絵は未完成のまま十年の歳月を忘却の深淵に横たえられたままだった。そして十年後に彼女は再び同じ場所に画架を立てるのだった。

一方妻を亡くした Ramsay 氏は依然として Q で足踏みを続けており（Carmichael 氏は戦時中に一冊の詩集を出版して、今や国内では大詩人の名声を得ているというのに）、彼の不安と焦燥と孤独感はますますつのる一方であった。彼はますます自己中心的となり、横暴となっていた。Lily から見ればこんな彼は、まさに破壊と混沌をもたらす存在以外の何ものでもなく、彼女の仕事のさまたげとなる人物にすぎなかった。実際 Ramsay 夫人のいない別荘は「お互いに関連のない激情」の充満する場所に過ぎず、Ramsay 夫人が十年前に創造したあの融和はもはや存在していなかったのである。その結果、Ramsay 氏はかつて妻に求めたものを今や Lily Briscoe に執拗に求めてくるのだった。だが彼女はそれをどうしても彼に与えることが出来なかったのである。

Mr Ramsay sighed to the full. He waited. Was she not going to say anything? Did she not see what he wanted from her? Then he said he had a particular reason for wanting to go to the Lighthouse. ... He sighed profoundly. He sighed significantly. All Lily wished was that this enormous flood of grief, this insatiable hunger for sympathy, this demand that she should surrender herself up to him entirely, and even so he had sorrows enough to keep her supplied for ever, should leave her, should be diverted... before it swept her down in its flow. (172)

かくして Ramsay 氏は Lily からとうとう同情をひき出せないまま、灯台へ

むかって船出し、Lily は芝生で十年前の絵とむかいあう。彼女は一方において「この恐るべき年来の敵——この別のもの、この真実、この現実」とむかいあう心と、他方においては気の毒に思いながらも彼が求めたものをとうとう与えることが出来なかった、という感情とに奇妙に二分されて、「未だ生まれざる魂の如く、魂は肉体から分離され、風に吹きさらされているどこかの尖塔の上でとまどい、疑惑の突風に防御の手だてもなくさらされている」ような感情のために、十年前と同様、カンバスのどこから筆をつけていいのかわからずに立ちすくむのだった。彼女の耳にはかつて、Tansley が「女には絵は描けませんよ。ものを創造することはできませんよ。」と言った言葉がいまだに響いているのだった。だが今ではその言葉は Tansley が言おうが、誰が言おうが問題ではなくなっている。彼女の意識は次第に現実から遠ざかり、おのれの名前も、自我も、容貌も忘れて「過去へのトンネルをまっしぐらに進んで行くのだった。」その行きつく果てにこそ、彼女の求めている「真実」があるかのように。

一方、灯台にむかった小舟の中では操舵を James に一任した Ramsay 氏と船頭の Macalister は、かつての暴風雨の時の話に花を咲かせ、Macalister の息子は魚釣りに専念し、Cam は James との「父親の横暴と自己中心的態度」に飽くまでも抵抗して、父親とは一切口をきかない、という密約を守り通そうとして、無言のまま遠くにかすんでいる陸地を見つめたままだった。父親 Ramsay はこんな二人の子どもを気にしながら、彼らにむかって話の合い間に方角を尋ねるが、James はかたくなに口をとざし、Cam は海の直只中で全く方角がわからずに途方に暮れる。こんな彼女を見て Ramsay 氏は半分叱りながらも半分は嘲笑しながら思うのだった。

He thought, women are always like that; the vagueness of their minds is hopeless; it was a thing he had never been able to understand; but so it was. It had been so with her—his wife. They could not keep anything clearly fixed in their minds. But he had been wrong to be angry with her; moreover, did he not rather like this vagueness in

だがここに見られるのは単なる嘲笑だけであろうか。この嘲笑の中には望めどもついに達し得なかった Z に対する諦めと、おのれの非才に対する反省、そして他人の美点に対する開眼が微かながらもあらわれているのではないだろうか。十年前のあの峻烈なまでの事実に対する忠実さ、論理への固執が影をひそめているのではないか。これは単に十年という歳月がもたらした変化、とのみは言い切れないであろう。もち論それは認めなくてはならないだろう。だがもっと重要なことは、Ramsay 夫人が自己の身を犠牲にしてまで彼に与えようとしたもの——それは彼女の本能的直観による「真実」である——を彼が徐々に悟りつつあった、ということではないだろうか。俗な表現を借りれば、Ramsay 夫人は死んでなお彼の心の中に生きていたのである。それは十年前の晩餐会の席上、彼女が「この人たちがどんなに長く生きようとも、この人たちはこの家に、この時に、きっと戻ってくる。」と思ったことの真実を証明してみせたことにほかならない。つまり「この人たちがどんなに長く生きようとも……」という彼女の考えは、晩餐会に同席した人々が生きている限りは、彼女のイメージが彼らの記憶の中で生き続けるだろう、ということにほかならなかったのである。これは *Mrs Dalloway* における Clarissa の先験論的な考えと全く軌を一にするものであり、<sup>(3)</sup> ここにわれわれは Virginia Woolf の死に対する考え方の片鱗をうかがい知ることができるであろう。

やがて Ramsay 氏はポケットから本を取り出して読み始める。まるでそれを読み終えれば彼の目ざしていた Z に到達できるのだと思っているかのような猛烈な熱心さと速さでもって。

Ramsay 氏たちの乗った舟が、このようにして刻一刻岸から遠ざかり、灯台に近づくにつれて、Lily は Ramsay 氏に対する自分の感情が徐々に変化してゆくのを感じるのだった。同時に奇妙に二分されていた感情の一方ではますます「過去へのトンネルをまっしぐらに進んで行き」、Ramsay 夫人の在りし日の姿がまざまざと彼女の脳裏に去来するのであった。それはあのすべてを思い

のままにしてしまう横暴と積極性を持った Ramsay 夫人の姿であると同時に冷え切った一座を暖かい愛の翼で覆う彼女の姿であり、また箆を腕にして町に買い物に出かける彼女の姿であった。そして Lily は求めても得られぬおのれの「真実」のために、今こそ Ramsay 夫人の膝下に泣き伏したい気持ちにかられるのだった。そして Ramsay 氏のミルクにはさみ虫が入っていた時に娘の Prue が恐縮のあまり、顔が蒼ざめた時のあのやさしくいたわる母としての Ramsay 夫人の姿に泣きじゃくりたい衝動に駆られるのだった。その時、突然彼女は窓に何か白い物が動くのを感じてわれに戻る。それは「踏み段の上に奇妙な形の三角形の影を投げかけた」のだった。そして「それは絵の構成をほんの少し変えた。」それは十年前に晩餐会の席上で「木をもっと真中の方に移して」と思ってもとうとう達し得なかった構成であり、彼女の探し求めていた「真実」の姿であった。その「真実」とは、幻の Ramsay 夫人の像と窓辺の現実の人影とのあわいに漂ようところの、幻であると同時に現実でもある像であり、またそのいずれにも属さず、現実と幻との間に漂よう像でもあった。

One wanted, she thought, dipping her brush deliberately, to be on a level with ordinary experience, to feel simply that's a chair, that's a table, and yet at the same time, It's a miracle, it's an ecstasy. (229)

これこそはまさに、Ramsay 氏に象徴される論理的事実と、Ramsay 夫人に象徴される直観的真理との融合であり、まさに「物そのもの」の姿である。作者 Virginia Woolf は次のように言っている。

Some collaboration has to take place in the mind between the woman and the man before the art of creation can be accomplished. Some marriage of opposites has to be consummated.<sup>(4)</sup>

つまり Virginia Woolf の言う androgynous な状態<sup>(5)</sup>こそ Lily の求める「真

実」の姿であったのだ。

Lily がおのれの「真実」の姿を見てとった瞬間に彼女はまた、Ramsay 氏に対して同情の気持ちをふり注ぐことが出来る思いに到達したのだった。

Ah, but she was relieved. Whatever she had wanted to give him when he left her that morning, she had given him at last. (236)

彼女はまさに救われたのである。

一方、小舟が灯台に近づくにつれて、かつては霧の中に幻のように浮かんで見えた、あのやさしい光を放つ灯台、そして母親の Ramsay がその第三番目の最も長い安定した光をおのれと同一視したあの灯台、それが真近に見ると白と黒でまだらに色彩をほどこされており、洗濯物が干されている岩の上に雄々しく、たくましく屹立する灯台であり、しかも両者は同一の灯台であることを、James ははじめて悟ったのだった。そして Lily が、求めていたその「真実」の姿に接したのと時を同じくして舟は灯台に到着する。打度この時本を読み終えた Ramsay 氏は、ここではじめて息子 James の操舵を賞めたのだった。それは十年もの長い間彼が待ち望んでいたものであった。つまり灯台への到着は Ramsay 氏にとっても一つの悟りであり、James にとっても、それは真実への到達を意味するものであった。今こそ James と Cam は二人とも「何でも言ってごらんなさい。そうすればそれをあなたにあげましょう」と、父親にむかって言いたい気持ちになったのだった。それは彼ら二人が今漸く父親の横暴から脱して、魂の自由を得たことにほかならないのである。そしてそれは、まさに Lily がおのれの「真実」に到達した気持ちと同じものであり、Lily がその同じ気持ちになった時と、彼ら二人が灯台に到着してその気持ちになった時とが同時であることによって彼らの気持ちの同一性が強調されているのである。かくして Lily は絵を完成すべく最後の筆を力強くキャンパスにおろすのであった。

Quickly as if she were recalled by something over there, she turned

to her canvas. There it was—her picture...With a sudden intensity, as if she saw it clear for a second she drew a line there, in the centre. It was done; it was finished. Yes, she thought, laying down her brush in extreme fatigue, I have had my vision. (237)

## V

James が舟の中から見た灯台についての印象は、そのまま灯台が何を意味しているのかを明瞭に物語っている。つまり彼が幼児の頃、霧の中に浮かんで見えた灯台は、母親 Ramsay の象徴であり、舟の中から真近に見た灯台は父親 Ramsay の象徴としての灯台であったのだ。この意味では灯台は、つまり Ramsay 夫妻の象徴である、ということが出来よう。それはある時には幻の中にやさしくあらわれて人の心を慰め、迷へる者にその進むべき方向を暖かい愛情をもって指示する、いわば本能的直観の「真実」を伝え、また他の時には、人の魂を圧倒するかのようにそのたくましい姿を眼前にあらわして、事実の論理性が本能的直観に優ることを誇示するかのものであり、この二面性こそが実は「真実」の姿であることを象徴している、ということが出来よう。そしてこの意味では、灯台はあの晩餐会の席上での蠟燭によって暗示されたものと同じであった。つまり蠟燭に火を点じさせたのは Ramsay 夫人であり、そのことによって流動する外部の世界に対して、部屋の内部に暖かい安定感を生み出したのは、したがって Ramsay 夫人の生成力によるものである、ということができよう。つまりこの蠟燭は、現実の灯台が流動して己まない大海原の真只中に、毅然として不動の姿を屹立させている灯台のイメージであったのだ。同時にそれは夫人の生命力を得てはじめて蒙昧の暗黒の中に知性の光を放つ Ramsay 氏の象徴であり、したがってその光の中には Ramsay 夫人の生命力が宿している点で夫人の象徴である。したがって蠟燭も、灯台も、共に Ramsay 夫妻の融合の象徴である、ということができよう。

さらに以上の事は灯台が象徴するもう一つの意味へ導くのである。つまり

Lily Briscoe が十年前の夕暮に Ramsay 夫妻が腕を組んで散歩をしている姿に結婚の象徴を見出したことから明らかな如く、灯台が Ramsay 夫妻の融合の象徴である、ということは masculinity と femininity とが融合された状態であり、Virginia Woolf の言う androgynous な状態をあらわすものである。つまりそれは人間性が到達すべく探求すべき理想の象徴である。この状態こそが魂を解放し、芸術作品を生み出す源となる状態であって、Lily Briscoe が、ついに幻の姿をとらへて彼女の絵を完成することが出来たのは、実にこの状態においてであったのだ。作者はこの状態を次のように述べている。

...that razor edge of balance between two opposite forces; Mr Ramsay and the picture;... (219)

つまりそれは、Ramsay 氏に代表されている論理性と、絵画にあらわされている直観性との平衡の上に存在するものであり、換言すれば、前述した如く幻と現実とのあわいに漂う状態であり、主観と客観との壁が極端に薄くなって、おのれの名前も自我も忘失する状態である。そしてそれこそが作者 Virginia Woolf 自身が求め続けてきた状態でもあった。

このように観てくると Lily Briscoe は作者 Virginia Woolf の分身である、ということが出来よう。James Hafley は次のように言っている。

There is obviously a more than casual similarity between Mr Paunceforte and the Edwardian novelists, and between Lily and the Georgians.<sup>(6)</sup>

つまり画家 Paunceforte にエドワード朝の小説家の姿を見るとすると、「真実」の姿を主観で曲げた Paunceforte の絵に飽きたらず、おのれの「真実」を発見しようと努力した Lily の姿は明らかに作者自身の像でなければならない。

そして Lily が「真実」の発見に必要としたものは、まず Ramsay 氏を客観的に眺めるための距離であった。彼の乗った小舟が岸から遠ざかるにつれて、

彼女の彼に対する感情が変化していったことは前述した通りであるが、これは明らかに距離が彼女の心に及ぼした影響であった。ということは作者自身のみならずからの芸術を完成させるためには父親 Leslie Stephen を客観的に見るだけの距離を得なければならなかった、ということであり、それはすなわち作者に対する父親の精神的な圧迫、影響からの必死の脱出の試みのあらわれであるということが出来よう。そのためには何らかの意味で父親を一度客観視した上で作品に描き出すのが、作家としての Virginia Woolf にとっては唯一の方法であり、必要な避けることのできない過程であったのだ。ちょうど James Joyce にとって *A Portrait of the Artist as a Young Man* が、彼の生長途上で経なければならぬ過程であったと同じように。

したがってこの意味から言うと、James と Cam が父親 Ramsay の横暴に対して必死の抵抗を試みてはじめて魂の自由を獲得した姿は、まさに父親 Leslie Stephen の精神的圧迫から、この作品を書くことによって漸く脱し得た作者自身の姿でもある。実際、作者はその日記の中で次のように書いている。

I used to think of him and mother daily ; but writing the *Lighthouse* laid them in my mind. And he comes back sometimes, but differently.<sup>(7)</sup>

この作品を書くことによって、父は「違った風に」あらわれるようになったとは、つまり彼女が父親の影響から脱出して、父親を客観的に見ることができるようになったことを意味していることは明らかである。

そして最後に Lily Briscoe が絵を完成するきっかけを作ってくれたのが Ramsay 夫人の幻であったことをわれわれは想起しなければならない。13才にして美しき母を亡くした Virginia Woolf は、恐らく生涯母親の姿が脳裏に去来したに違いない。創作に行きづまって苦悩にさいなまれる時に、ちょうど Lily が Ramsay 夫人に対して感じたと同じように、恐らく作者は母親の暖かい膝にすがって泣きじゃくりたい気持をどうすることもできないほど、切々と感じたであろうことは想像に難くない。だとすると、この作品はこの意味では亡き母

